

対人場面において情動知能がコーピング選択及び心理的ストレス反応に与える影響の検討

○金逸蓉 (同志社大学大学院心理学研究科), 佐藤豪 (同志社大学心理学部)

キーワード: 対人場面, 情動知能, コーピング, 心理的ストレス反応

目的

対人ストレスイベントは遭遇頻度の高いストレスフル状況で、ストレス対処では対人場面は考慮しなければならない。ストレス反応生起プロセスではストレス源への認知的評価、認知的評価の結果により喚起される情動、これらに基づき選択されるコーピングが媒介要因となりストレス反応に違いが生じる (Lazarus, 1999)。

情動に関する能力として情動知能(以下EI)があり、EIの高さは適応的なコーピング選択を促進する(野崎・子安, 2013)。対人場面でのコーピングである対人ストレスコーピングは対人ストレスイベントの相手との親密度で使用頻度が変化する(加藤, 2007)。そのため対人場面のコーピング研究では親密度を考慮に入れなければならない。またEIはストレス反応と負の相関が見られる(豊田・照田, 2013)。EIからストレス反応への直接効果の他にコーピングを介してストレス反応に与える間接効果が考えられる。この二つを比較することで、EIがストレス反応に与える影響をより明らかにできる。

そこで本研究では心理的ストレス反応に焦点をあて、対人関係の親密度別にEIがコーピング選択及び心理的ストレス反応に与える影響を調査した。心理的ストレス反応を低減させる或いは増幅させない適応的対人ストレスコーピングの検討、EIが適応的コーピングの選択を促進するかの検証、EIが心理的ストレス反応に与える直接効果及びコーピングを介して与える間接効果の検証を目的とした。

方法

対象者 大学生 299名(女性162名,男性137名,平均年齢20.31±0.99歳)を対象とした。回答の自由及び個人情報保護等倫理的配慮に関して説明し、同意した場合のみ回答するよう求めた。

質問紙 (1)性別、年齢の記入を求めた。(2)EI:J-WLEIS(豊田・山本, 2011)を用いた。(3)親密度:対人関係の親密度を測定する親密度尺度を作成した。過去に対人トラブルとなった人物との関係性の記述、その親密度を0-100点の範囲で数値化させ記入を求めた。親しくない条件及び親しい条件について回答を求めた。その後、親密度尺度で想起したトラブルに基づき、(4)対人ストレスコーピング:ISI-15(加藤, 2002)、(5)心理的ストレス反応:SRS-18(鈴木他, 1998)に回答を求めた。

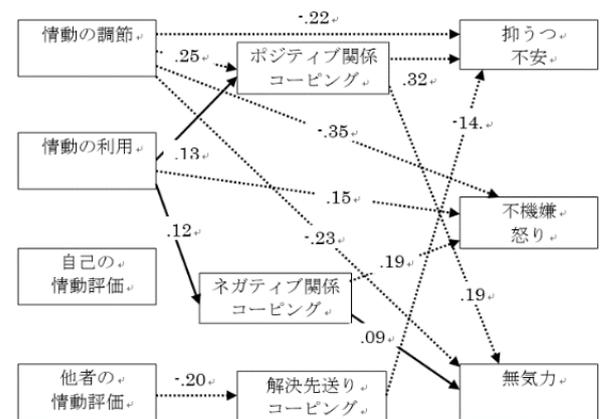
質問紙の構成 J-WLEIS、親密度尺度、ISI-15、SRS-18、親密度尺度、ISI-15、SRS-18の順番で構成した。親しくない条件の親密度尺度が先のセット、親しい条件の親密度尺度が先のセットの2種類を作成し、カウンターバランスして調査を行った。

結果・考察

親密度条件別に共分散構造分析を用いて検証した。親しい条件の採択モデルがFigure1である。情動の調節と抑うつ不安及び無気力に直接効果とポジティブ関係コーピングを介した間接効果、情動の利用と不機嫌怒りに直接効果とネガティブ関係コーピングを介した間接効果がみられた。いずれも直接効果の方が影響力が大きかった。

親しくない条件モデルでは後述する点を除きFigure1とほぼ同様の結果が得られた。異なる点として、自己の情動評価とネガティブ関係コーピング($\beta = .14, p < .001$)、解決先送りコーピング($\beta = -.14, p < .001$)、無気力($\beta = -.16, p < .001$)、他者の情動評価と不機嫌怒り($\beta = .16, p < .05$)に有意な関連がみられた。情動の利用とネガティブ関係コーピング及び不機嫌怒り、解決先送りコーピングと抑うつ不安は関連がなかった。また情動の調節と無気力及び抑うつ不安に直接効果とポジティブ関係コーピングを介した間接効果、自己の情動評価と無気力に直接効果とネガティブ関係コーピングを介した間接効果がみられ、いずれも直接効果の影響力が大きかった。

この結果から親密度に関わらず解決先送りコーピングが適応的で、EIの高さは適応的コーピングを促進しないことがわかった。またEIが心理的ストレス反応に対して与える直接効果の方が間接効果よりも影響力が大きく、EIが高いほど対人ストレスイベントによって生じるストレス反応が少ないことが示唆された。このことから人のストレス耐性を強めるにはEIを向上させる介入が有効に働く可能性が示唆された。



$\chi^2(22)=41.983, p < .01, GFI=.973, AGFI=.933, RMSEA=.055$

Figure 1. 親しい条件における共分散構造分析結果。

注: 実線は5%有意、破線は1%有意なパスを表す。
パス係数の値は標準化係数。
見やすくするために5%水準に達しないパス、誤差変数及び誤差相関は省略した。

利益相反開示: 発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。(ICHIYOU Kin, SUGURU Sato)